

令和元年12月17日
(一財)道南歴史文化振興財団
事業課長 坪井睦美

【タイトル】

「縄文はおもしろい」

私が南茅部の縄文文化に触れたのは、平成元年に遺跡の発掘作業員に応募したことがきっかけである。

発掘作業をしていると、多くの土器や石器が発見される。なかでも、装飾が豊かな土器を目にしたときに、この土器はどうやって作っているのだろう、この模様はどうやって付けられているのだろう、と興味が湧いてきた。いつか自分も縄文土器を作ってみたいという思いが強くなった。そこで、自分なりに土器づくりに挑戦したのだが、苦労の末にできた土器は分厚く斜めに傾き、不格好なものだった。しかし、自分で初めて作ったということ、何よりも縄目の文様を入れた瞬間に「縄文土器」に変身したことに感動した。いまでも土器づくりの時にはこの感覚が蘇る。

縄文に携わり今年で31年目になる。私が所属する道南歴史文化振興財団は、平成28年から函館市縄文文化交流センターの指定管理者として博物館の管理運営を実施している。館内の展示は、縄文の生活、縄文の精神をテーマにしており、その展示物のなかには自分が発掘に関わったものもある。解説をするときに心掛けていることは、これまで経験した発掘調査でのエピソードを交えることである。そのことで、見学に訪れた人にも深い関心をもってもらえる。

当縄文センターでは「一万年も自然と調和し、命を尊んできた縄文文化」を理解してもらうために、土器づくりやカックウの顔づくり、釣針づくり、縄文染めなどの体験講座を実施している。縄文の釣り針は現代のものと同じ形で、材質が鹿角から鉄やステンレスに変わっただけである。鹿角で作った釣り針を使って実際に海で釣ってみる。驚くほどよく釣れて実におもしろい。参加した人たちからも「わー、おー、きゃー」などと歓声があちらこちらから沸き上がる。あらためて縄文の知恵や技術を実感する。

縄文染めも私の一押しメニューである。縄文文化が自然に育まれた文化であることを、この講座をとおして体感してほしいという願いを込めて行っている。春にはフキノトウ、ヨモギ、ヤマザクラの葉、秋にはヤマモミジ、ヤマブドウ、冬にはイチイの葉を使い、四季折々の植物たちが持っている黄色や緑、桜色などの色を借りて布を染めてみる。次第に色濃く染まっていく様子に参加者の顔が自然とほころぶ。そうした笑顔を見る度に、この地の豊かな自然を未来に繋げていきたいと思う。

ここ数年、縄文ブームが到来している。土偶や土器のデザインが現代アートとして、人々の心を捉えているのだろうか。それとも、まだ解明されていない縄文の謎に魅力を感じるのだろうか。縄文は“おもしろい”。この言葉の入り口はさまざまあっていいと思っている。これからも、展示の解説や体験講座をとおして、そのきっかけづくりをしていきたい。